

倫理法人会の会員として、経営者モーニングセミナーや各種の研修に参加されている皆さんにとって、『万人幸福の業』第十一条「万物生々」の次の一節は、よく耳にするものだと思います。

物を象徴し、すべての財を具象したのが金銭である。金銭は物質の中で、最も敏感な生物である。金銭はこれを大切にする人に集まる。

この一節を読んで「お金を大切に扱っていれば、お金がたくさん儲かる」と解釈するのは、少々浅い読み方と言えるでしょう。確かに、前段には機械や道具の扱い方によって結果が異なることが記されており、続く文章には「ドウマキの中で肌身はなさず」や「札のしわをのぼす」など、大切にされる具体例が挙げられています。そのため、「大切にすればたくさん集まる」と直接結びつけるのも無理はありません。

しかし、その後の文章には「ほんとうに大切にすることは、むだに使わぬことであり、さらに金銭を生かして使うこと」とあります。金銭を生かして使うとは、必要なことに思い切って使うことであり、経営者であるならば「私利私欲のためでなく、公利公益のために」という姿勢が求められます。

となれば、業績を上げたいと願う「形式的な行為」は、「たくさん集めたい」という欲心が先にあり、そのために「大切にすること」という打算的な姿勢といえます。「カタチから入る実践」ということもありませんが、本筋からすれば、ずれているといえます。そ



お金に見られているからこそ 金銭の本質とその力を知ろう

して、こうした経営者自身の金銭に対する姿勢は、誰が見るでもなく「金銭」そのものが一部始終を見ている。

というのも、私たちが学ぶ「純粹倫理」という生活法則では、「生きています」ということを「働き」と定義しています。生物であるかどうかにかかわらず、何らかの働き（役割）があるものは生きていますし、その観点から「万物は生きています」と捉えます。

「生きています」となれば、目という器官がなくても、私たちの扱い方や心根を見られていると考えるのも不思議ではありません。さらに、こうして得た「良い使い方をする人」とそうでない人「の情報」は、「金銭」同士が連絡し合って共有しているような節があります。したがって、「良い使い方をする人」のもとには「金銭」が集まり、がむしやりに「集めよう」としても「良い使い方でない」ならば「金銭」が集まってこない仕組みになっているでしょう。

物々交換という曖昧な方法に対し、公正で円滑な取引を可能にするために人間が生み出したのが「金銭」です。

人間が生み出したものである以上、その生みの親である人間の意思を察することは「金銭」にとっては容易なことなのかもしれません。

俗に言う「お金は怖い」という表現は、持った人の思考を狂わせるという意味で使われますが、実は「お金」そのものが人間の想定を超える恐ろしい存在であることを心に留めておきたいものです。